

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見てくるアメリカの風景

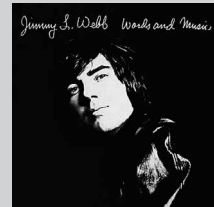
文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第36回

ジミー・ウェブ
「P・F・スローン」

名シンガー・ソングライターの復活を願う



Jimmy L. Webb
"Words And Music"
Reprise 0RS6421 [1970]
▶ソリッド(ウルトラ・ヴァイヴ)
©CDSOL7150

試聴できなかった時代だ。新しい音楽情報を知りたければ、『ローリング・ストーン』や『クローダデー』といった雑誌を読むしかない。そういう時代だったから、実際の音を知るには、このようなコンピレーション盤はとても重要だった。しかし、手に入れるにはレコードのインナー・スリーブに印刷されているクーポンを切り抜き、小切手と一緒にアメリカのレコード会社まで送らなければならなかった。でも1枚ものなら1ドル、2枚組なら2ドル、そして3枚組は確か3ドルと格安なのが救いだった。

「Looney Tunes And Merrie Melodies」には、ワーナー・レベール傘下の様々なアーティストの曲が一つずつ入っていた。フェイスズ、ブラック・サバス、リトル・ファイート、フリートウッド・マック、グレイトフル・デッド、ライ・クーパー、ジミ・ヘンドリクス、ヴァン・モリソン、フランク・ザッパ……。こんな錚々たるアーティストの曲がトータル36トラック。なかでも一番印象的だったのが、この曲だった。初めて聴いたときには、ジミーの存在をまだ知らずにいて、レコードのブックレットで読んだ。ジミー・ウェブは、グレン・

3枚組のボックス・セット「Looney Tunes And Merrie Melodies」(Warner Bros. 0PRO423 [1970])の中であった。70年俺がまだ中学生のときで、父の仕事の関係で韓国に住んでいたころだ。当時の韓国では、新しいレコードは米軍キャンプのPXで買うしかなかった(PXとは軍の中で展開する店だ)。でもセレクトションは少なく、レコードは全部プラスチックでシールされ、

最近ではジャクソン・ブラウンとデュエットしたり、英国の女性アーティスト・ルーマーが、今回のテーマ曲「P・F・スローン」をカバーしたりと、ジミー・ウェブには俄かに注目が集まっている。先日、俺が観に行った「ビルボードライブ東京」でのコンサートでは、この曲を最後に歌っていた。俺がこの曲を初めて聴いたのは、69年にワーナーから発売されたコンピレーション

何年も姿を見せなくなる。ジミーはそんなスローンの潔さや誠実に心打たれ、熱烈なエールをこの曲に込めて書いたという。とはいえ数年後、残念ながら二人の仲は悪くなり、ジミーはこの曲はP・F・スローンのことを歌っているのではなく、ただ作った名前だと言っていたさうだ。しかし、ジミーが70年に発表した『ワーズ・アンド・ミュージック』収録されたこの曲は、翌年にはアソシエーションや英国のユニコーンのアルバムで取り上げられ、77年には自身の『エル・ミラーージュ』で再演している。

I have been seeking P. F. Sloan
But no one knows where he has gone
No one ever heard the song that boy sent winging

俺はP・F・スローンを探しているんだ。だけど彼がどこに行ったのか誰も分からない。これはスローンが音楽シーンから消えてしまったことを指す。俺がヒットさせた曲を誰も聴いてない。この「winging」は羽に載せることで、つまりはヒットさせたという意味だ。スローンが作

ったヒット曲といえば、ジョニー・リヴァースの「シークレット・エージェンツ・マン」やタートルズの「ユー・ペイパー」、バリー・マクワイア「明日なき世界」もそうだが、これらが彼の手による曲だとは誰も意識していないだろう、ということを知っている。

Oh yeah
Now you might sigh and you might moan
And sweat about the skin and bone
Yes, but you just smiled and read the Rolling Stone
While he continued singing

「あなたのため息をつき、うめき声を上げるかもしれない。そして、ガリガリに瘦せた身体のことを心配するのだろう。ここでの「you」は、この曲を聴いている人々のことだ。「sweat」は心配すること。心配すると汗をかくだろう?」俺もあなたはただ笑顔で『ローリング・ストーン』誌を読む。だけどその間、彼は歌い続けていたんだ。人生に疲れ、自分の身体のことしか考える余裕のないような人でも、『ローリング・ストーン』誌は楽しみにして読ん

キャンベルの「恋はフェニックス」や「ガルーエストン」、フィフス・デイメンションの「ビートでジャンプ」などのソングライターとして有名だとあった。オクラホマ出身のジミーは10代のときに家族と一緒にロサンゼルスに引越して、ソングライターの道を歩き始めた。そのとき、彼はソングライターのP・F・スローンと仕事をしたさうだ。スローンはバリー・マクワイアの反戦曲「明日なき世界(Eve Of Destruction)」を65年に書いて大ヒットし、自分のレコードを再び出すことになったが、残念ながら売れなかった。ポプ・ディランが先頭に立っていたフォーク・ロックの世界から拒絶されてしまったんだ。ポップなアーティストの曲をたくさん書いていたスローンは、ただその時代のトレンドに乗っただけのスタジオマンだと言われてしまった。P・F・スローンはジミーより1歳年上で、ジミーに「ソングライター」でなく、「シンガー・ソングライター」になれとアドヴァイスしたさうだ。その後、レコード会社ともめたスローンは、契約を切るために、それまで書いた曲を全部レコード会社に渡してしまった。そしてNYの親元に戻り、

でいる。しかし、そんな人でも、数々の名曲を世に送っているP・F・スローンのことは端から念頭にない。そういつたニュアンスで歌われている。

(chorus)

Oh yeah, now listen to him singing

No no no no no no...

No don't sing this song

No no no no no no...

No don't sing this song

It belongs to P. F. Sloan

From now on

《この曲を歌う彼の声を聴いてあげてほしい。でも、この曲をあなたが歌ってはけなす。P・F・スローンの曲だからだ。これからも永遠に》

My old friend Tigger up and died

So now they got him stuffed and dried

You know they tanned his hide

He's crucified

He's staring glassy eyed through the

parlor door, Oh yeah



ここからは、直接はスローンのことを歌っていない。《俺の友達ティガーは、あつという間に死んでしまった》。'up and died'は、《突然死んだ》という意味だ。

《そして彼らは彼に詰めものをして乾かし、皮をなめて十字架に張りつけた。彼はガラスのような目で客間を見つめている》。

つまり剥製になったのだ。この'Tigger'はアメリカでは最も有名な馬で、30年代から60年代に大人気だった映画俳優のロイ・ロジャーズの持ち馬。ティガーはパロミノという種類で、肌はゴールド、タテガミと尻尾はキレイな白だった。ティガーは65年に死んで剥製にされ、目にはガラスが嵌められた。'glassy eyed'は、眼に表情がないこと。真っ直ぐ見るときのことも指す。もしかしたら剥製とP・F・スローンを重ね合わせているのかもしれない。ちなみにこの'Tigger'の剥製は2009年にオークションで26万6500ドルで落札された。

The London Bridge was finally found
They moved it to another town

《ロンドン橋がやっと見つかった。ほか

の街に移動させたんだ》。この部分も、P・F・スローンの消息についてを匂わせていると俺は思う。ロンドン橋はテムズ川を渡る橋の総称で、ローマ時代からいくつも存在した。古くなって壊れそうになると、作り直す。でもこの曲に出てくるような移築されたロンドン橋は今までに1本しかなく、1831年に完成した、建築家ジョン・レニーによるものだ。しかし1924年には沈みはじめたのがわかり、新しい橋を造るにあたり、67年に売りに出された。それを買ったのがロバート・ピー・マカラックというアメリカ人で、彼は橋をバラしてアリゾナの住宅街に運び、もう一度組み立て直して川にかけた。71年のことだ。

And now all the people gather round

To watch the bridge fall down

But I don't think it will no more

《そして今は人々が橋の周りに集まって、橋が落ちるのを見に来ている》。そのことは、1600年代からある子供たちの歌で分かる。日本でもよく知られる「ロンドン橋落ちた」の歌だ。ロンドンの橋は落さず

が、アリゾナにある橋はしっかり固定してあるので、《でも、もう橋が落ちることはないだろう》(笑)。

(chorus) 前回と同

Nixon's come and bound to stay

He's taking all my sins away, you now

I heard it on the news today

It set my ears to ringing yeah

《ニクソンは長く滞在するようだ》。このニクソンは、ヴェトナム戦争時のアメリカ大統領リチャード・ミルハウス・ニクソンだ。《彼が僕らの罪をすべてなくしてくれると、今日のニュースで聞いた。それだけで僕の耳鳴りがひどくなった》。ニクソンはヴェトナム戦争をエスカレートさせた大統領として、若い人たちやリベラル派には嫌われていたんだ。時代を映し出す詩だ。

Cause the last time I saw P.F. Sloan

He was summer burned

He was winter blown

You know he turned the corner all alone

But he continued
Yes, he continued
Oh, he continued singing

《僕が最後にP・F・スローンを見たとき、彼は夏の暑さに焼けていて、冬の風に耐えていた》。これはつまり、大変なことになっているというニュアンスを表わしている。《でも、彼はたった一人で人生の曲がり角を曲がり、歌い続けていた。さあ、彼の歌を聴こう》。'turned the corner'という言葉は、新しい方向に変わっていったという意味だ。

(chorus) 前回と同

この曲はジミー・ウェブの名作と言える。P・F・スローンはあれからもうほとんど名前を聞かない。日本では69年に「孤独の世界」がヒット、94年には日本先行で22年ぶりのソロ・アルバムが出されたのだが、しかし音楽の力はすごい。一人歩きして、人々の心に刻まれる。そして「P・F・スローン」のようにまた誰かに歌われ、それを聴いた誰かの思いの一片になるのだ。